

< 鶴ヶ島市 >

読者の投書から明らかとなった・・・

## 鶴ヶ島市議による「飲酒」暴力事件!!!

### 『金泉婦貴子 鶴ヶ島市議会議長 への取材』

2018年5月10日(木) 11:15～

金泉婦貴子現鶴ヶ島市議会議長は、内野嘉広市議による出雲敏太郎市議に対する飲酒暴力事件を認知していた。両市議は泥酔状態で口論となり、内野市議から暴力を受けた出雲市議は、警察に訴えたものの内野市議と出雲市議は常日頃は仲が良く、故に出雲市議は翌々日、警察への訴えを取り下げたと語る。

この事件発覚後、当時、内野・出雲両市議が所属していた会派《新政クラブ》において、両市議に対し「二度とこのような事を起こさぬよう」と強く注意し反省を促し、議員としての認識が無さ過ぎることや、バッチの重みを認識するようにと両市議に対し厳しく説諭したと金泉現議長は語る。

当時議長であった齊藤芳久市議も、「このようなことはあってはならない話だ」と両市議に議員としての心構えを説いたという。また同時期、会派代表であった藤原建志市議も両市議に対し、金泉・齊藤両市議より更に厳しく内野・出雲両市議に反省を求めた。この時点、内野・出雲両市議は既に和解していたため、議会や代表者会議への公式な報告は行っていない。

この件は、なるべく穏便に済ませようとの思いで、両市議の処分を会派内での忠告で終わらせている。金泉議長は、同じ会派の市議なので守ってやりたいという心情であったと話す。

本紙が「この事件は揉み消したのではないか」と問うと、金泉議長は「受け止め方として揉み消しと取られるのか…会派の中で本人達に反省を求め、このようなことは今後絶対にないように嚴重注意をして収めた」と揉み消しを意識していなかった

たと回答した。過去に当該事件と同様なことがあったのかを質すと、金泉議長は「私の知る限りではない」との回答であった。

本紙は、市民の投書で知った当該事件を公表する旨を金泉議長に伝えた。

金泉議長の話によれば、この事件後、内野市議は自身の起こした当該事件を自身で外部へ洩らしているという。内野市議は悪びれた様子もなく、自身の会派や周辺に迷惑をかけたという認識が希薄であった。

このことに関して金泉議長は、内野市議に対し「議員として恥ずかしくないのか。情けない。あまりにも考えが、議員として幼すぎる」と話す。

同じ会派にいる若手議員なので事件後、自粛して議員の職務を全うしてくれることを願っていたが、両市議の姿勢に改善は見られないことを嘆いている。

詳細は判らぬが事件当時、内野市議と出雲市議の様態は、両市議ともかなり泥酔状態であったという。暴行された出雲市議が自宅に戻り、内野市議より受けた暴力による被害を警察に通報している。翌日、内野市議は出雲市議の自宅へ謝罪に行き、出雲市議はこれを受け入れ示談とした。翌々日、両市議は警察に行き出雲市議は訴えを取り消し示談という形を取ったと金泉議長は語っている。

内野市議からの会派への暴力事件に関する報告はないと言う。内野市議には反省の色は見えなかった。内野市議と出雲市議は「若い」ということもあって、会派内において他の市議と意見が食い違うことがあった。事件後、会派内での議論の結果、平成 29 年 4 月 27 日付けで内野・出雲両市議は会派を離脱した。

そして《つるがしま未来》という会派を両市議で立ち上げた。

最後に本紙は金泉議長に対し、当該暴力事件が表沙汰になった時点、当該事件を現議長としていかに扱うかの判断は重要であると伝えた。

#### ※ 注)

平成 29 年 10 月 22 日鶴ヶ島市議会議員補欠選挙において大曾根英明氏が当選する。大曾根(当時は元市議)氏は、自宅で内野・出雲両市議に大酒を振る舞い、それによって内野・出雲両市議が泥酔し両者口論の上、内野市議によるチンピラ・ゴロツキが如き暴力行為に及んだ。

内野市議による公人の節度を投げ捨てる醜態を演じた責任の一端は、鶴ヶ島市議に返り咲いた大曾根英明氏にもある。会派《大空・つるがしま未来》は、平成 29 年 11 月 15 日に会派《大空》と会派《つるがしま未来》そして大曾根市議とで設立された会派である。

## 『齊藤芳久鶴ヶ島市長への取材』

2018年5月14日(月) 11:30～

本紙より齊藤芳久市長に面会のアポイントを取るために、前日、秘書広報課・藤井課長を通じ、齊藤市長に提出した市民からの投書にある「内野市議の飲酒暴力事件」に関する概略と、本紙の見解を述べた一文を齊藤市長は読み終えていた。

市長は、内野嘉広市議による出雲敏太郎市議に対する暴力事件を認知していた。

**「事件の次の日に2人は仲直りしている。それでおしまい。という認識でいた」**と市長は話し出す。両市議を会派から出したのは、この事件が起きたことがきっかけとなり、元から内野・出雲両市議と会派の方針の不一致から彼らは出て行ったとのことであった。

この事件が起きた当時、市議会議長であった齊藤市長は、内野市議による出雲市議に対する酔った上での暴力行為を重大な問題であると認識していた。

しかし「両市議が通常の公の席で相手を殴った等の事件であれば問題であるが、普段から仲の良い両市議が酒を呑み、口論を交わし、その中で意見が違った。そういった中で、内野市議が出雲市議を殴ってしまった。しかし次の日、酔いが冷め普段の状況に戻り、お互いに反省し、これからも仲良くやっっていこうということで示談とした。現在も同じ会派で仲良く議員活動を行っている。」と話す。

当該事件が原因で会派での立ち位置をなくし、会派を離脱した内野・出雲両市議は、会派の議員との考え方の違いで、同じ会派で活動することは困難であるため、両市議は自分達の考え方で活動したいとの思いが強く新政クラブを離脱し、二人会派《つるがしま未来》を組み、後に会派《大空》と合体する流れとなったと言う。

当該事件を認知した時、会派内の金泉市議・藤原市議・齊藤市議は、それぞれ個別に両市議を厳しく嗜めた。この時点、既に両者は仲直りしており、内輪の問題として処理し、議会に報告はしなかったが鶴ヶ島市議会では、過去においてこのような不祥事はなかったという。

今回、市民からの投書により、市民社会に改めて市議による暴力事件が浮上し、公人としての市議にあってはならぬ飲酒のうへの暴力事件であり、当該問題は疎かには出来ないのではないかと本紙の質問に対し、齊藤市長は「暴力事件が暴露されたというが…両市議は普段から仲が良く、酒を呑んでいる内に意見が合わなくなり、このような仕儀となってしまったことをお互いに悪かったと話している。両市議の他愛もない喧嘩であると解釈している」と話す。ただし当時、議長の立場を以て、厳重注意を両市議

に行ったと言う。

当該暴力事件に関して、齊藤市長は「**結構、みんな知っているだろうな…**」と呟く。この件が外部に流出していることについて「**内野市議自身が地元で、こういうことをやった。と話している**」と齊藤市長は話す。

表沙汰にしなかったことは「**両市議が事件後、仲直りをしており、第三者的被害や後遺症が残る怪我ではなかったのも…**。」と語る。

両市議を会派から出るようにと指示したのは、齊藤市長であったという。

「会派から出さずに、市議とは市民より“選良”された市民の代表であるとの意義を先輩市議として教育をしなければいけなかったのではないか」との本紙の問いに、齊藤市長は「**両市議が事件を起こす前、2年間懸命に教育をした。議員としての考え方…議員としてこうあるべきだ…**ということを2年間、一所懸命教えた。しかし彼らには、その効果はなかった。たった一つの事を決めるにも若い人は考えが違う。だから両市議に、自分たちの考えを生かすべきだということで会派から出てもらった。私は滅多に眠れないことはなかったが、両市議を会派から出すか、出さないかで真剣に考え眠れなかった。」と話す。

齊藤市長は、倫理観・道徳観を欠いた両市議を2年間で育てきれず、当該事件を起こす結果となったことについて「**育てきれなかった責任は私にある。**」と話す。

会派《つるがしま未来》を組んだ内野・出雲両市議は、その後、会派《大空》と合併することとなり、齊藤市長は会派《大空》に「**私ができなかったのも、是非、ご指導をお願いします**」と頼んだという。市議として、若い人の考えをしっかりと持ち、それを2人で協力してやっということは、良いことであると齊藤市長は語る。

そのことについて「**両市議を野放しにしたのではないか**」と問うと、齊藤市長は「**野放しという表現は…そう言われるとそうだな**」と苦笑し否定はしなかった。

「**両市議には、2年間育てて貰ったという感謝の気持ちはないだろうな。人を育てるのは難しい…**。」と齊藤市長は話す。

齊藤市長は優しい面倒見の良い人物として定評があるが、内野・出雲両市議に対して将来を思いやる気持ちは、既に失せているようだ。

2年間に渡り、会派の長老議員共々に若手市議の両市議を有力市議に育て上げる努力が報われなかったとする両市議に向けた失望を禁じ得ぬ思いが、齊藤市長の静かな語り口の中に両市議に対する決別の意思が見て取れた。

「**今回、市民より本紙に厳しい投書が来たという事実を以て、鶴ヶ島市長としての現在の心境は…?**」と問うと、齊藤市長は「**当時の判断を覆す気はないが、大勢の**

市民のお考えは大切であると思う」と答え、しばらく間を置き「二人にはいい肥しになればよいと思う」と齊藤市長は語った。

齊藤市長による鶴ヶ島市政の方向付けは、課題が山積みだ。人の良さ優しさだけでは処理できない人事問題が背景に潜んでいる。多くの真っ当な職員が奮い立つ、新市長としての指導があつてこそ、鶴ヶ島市発展の更なる胎動となるのだ。

## 『藤原建志鶴ヶ島市議会議員への取材』

2018年5月14日(月) 12:00～

藤原市議の内野市議への人物評価は手厳しい。

藤原市議は、市民の代表者として市民の為に働く市議であることの姿勢を、内野・出雲両市議に対し、先輩議員としての態度・姿勢を以て範とすべく両市議を懸命に教育したと言う。この事は、他の市議より事実として本紙は内聞している。

藤原市議は、大曾根元市議宅で内野市議の醜態に関して、未来のある若手市議であり、内野・出雲両市議を会派の長として出来る限り守護することが、先輩市議として当然の義務であると考えていた。

内野市議から出雲市議が殴られたときに、直ぐに出雲市議が警察に連絡をしてしまった。この時点で藤原市議は「もうダメだと思った」と話す。事件の2日後の夜に、当時市長であった藤縄氏が藤原市議のところに来た。

藤縄市長は「110番が入って、警察が介入しているから、これはもう無理でしょう」と藤原市議に話したという。本紙による「暴力沙汰を犯した当事者である内野市議より会派への報告は…?」との問いに、斯様な騒ぎを起こした当人たちからは、会派へ事件を起こした顛末(てんまつ)の報告は一切ないとのことであった。

この場合、内野市議は加害者、出雲市議は被害者の立場。本来、内野市議こそが会派に対して、事件を起こした報告と反省と会派の諸氏に迷惑・心配をかけた謝罪があつてしかるべきだが、残念ながらそれはなかったと言う。

内野・出雲両市議の事件は、公になれば会派の長として責任を取るべきであると考えていたと、藤原市議は語る。しかし事件の翌日、出雲市議は内野市議の謝罪を受け内野市議と和解し、翌々日出雲市議は警察に対し訴えを取り下げていることが耳に入る。藤原市議は、「だからといって、これで済んだと軽く考えてはいけない。両市議はこれを機に、厳しく反省をしなければいけない。これが表沙汰になっていれ

**ば辞職勧告。これは当然なことである」と説諭したと話す。**

事件当時、内野市議に殴られた出雲市議は「**1発100万円取ってやる。200万円取ってやる**」と両市議による売り言葉・買い言葉の怒鳴り声が、周囲に聞こえていたという。事件後、2人に反省を促したが、内野市議においては「**何が悪いんだ!**」という態度で終始反省の色はなかった。こうした内野市議の姿勢が原因で内野・出雲両市議が会派から出て行ったというのが、実情であると藤原市議は話す。

大曾根市議が補欠選挙で再び市議に当選した時「**内野・出雲両市議の面倒を見るから会派《新政クラブ》に改めて入れてほしい**」と話しに来たが、会派から出て未だに反省皆無の内野市議らを大曾根議員が面倒を見るからと言っても、元の会派に入れるのは難しいと大曾根議員の申し出を断った。すると大曾根・内野・出雲3市議で会派を組むと思っていたが、結局、会派《大空》の2人を含む5人で会派を組む形になった。と藤原市議は語る。

ここでも藤原市議は「**内野は自身の行為を全然反省はしていない**」と繰り返す。

殴った本人と殴られた本人が、これではダメだと相互が反省し態度を改めるならば、藤原市議も考える余地はあったのだが、会派で先輩市議の言うことも聞かない…反省も見られない…ということであれば、会派として何のために今まで両市議を育ててきたのか…となってしまう。

内野市議に関して、日高市役所に勤めている頃からの色々な噂は聞いていた。

内野市議はお坊ちゃんて誰の言うことも聞かないというのは判っていたが、これほど酷いとは思っていなかったと藤原市議は話す。

市議を選択するのは市民であるが、内野市議のことを市民の皆さんは理解されていない。出雲市議には、精神的に弱い面がある。市議という大義と“選良”としての市民に尽くすという喜びと誇りを持ってもらいたい。

内野市議はお坊ちゃんて、見ての通りの性格。出雲市議の兄貴分であるから、言うことの聞かない弟分を酔った勢いで出雲市議を殴りつけたとは思いますが、泥酔しての行為は市議として許せぬ行為であり、何としてもやってはならない犯罪的行為である。大曾根市議も両市議の性格や事件を承知で預かった以上、内野市議に市議は公人であるとする認識・社会常識とはどういうものであるかを、しっかりと教えてもらいたいと語る。

内野市議には、自分が悪いことをしたという意識がない。議員が人を殴ったりすることは、絶対にいけない。この行為は犯罪行為です。ましてや警察が入ったので、全国版で報道されるという意識で当時は、会派の会長としての覚悟をしていたと藤原市議は話す。警察を呼んでいなければ、内々の事とすることもありえたが警察を

呼んだ時点で、公にならざるを得ない状況になったと藤原市議は苦悩したという。

内野市議の父親が以前、鶴ヶ島市の収入役であった。内野市議は地元の名士として、今後も市議として出馬してくるであろうが、あの性格を直さなければ議員として公の職務は遂行できない。

新政クラブの会議は、いつも9時から始めている。藤原市議は30分前に必ず控室に入る。会長である藤原市議が早く控室に来て、会議の内容・進行を再確認している姿をあえて彼らに見せているのだが、出雲市議は内野市議の言いなりに思える。

両市議は藤原市議がこうした市議の心構えを示しても、ベテラン議員のように最後に会派控室に入ってくる。

この2年間、私はずっと彼らに議員たるの姿勢を示しても、両市議にはその自覚はなかったようだと話す。また、先輩に対してお茶を入れたりすることは常識であるが、嫌々やっているのが手に取るように判る両市議の態度であった。

両市議には市議としての上下関係や先輩に対する敬意等は、全くない。メールを入れても「判りました」という返信もなく、常識を欠く態度、また協調性に欠ける両市議であったと藤原市議は話す。

両市議のこうした姿勢を改めさせようと2年間両市議に教示してきたが、両市議による改善はなかった。そして、あのような事が起きてしまった。会派の市議として、あの事件は警察事にもならず内輪の出来事として治まったが、残念ながら両市議には反省の色は全く見られなかった。

齊藤芳久現市長とは、10年来の付き合いだが、彼は信義があり、約束を必ず守る。あの人は優しい人で、面倒見が良い。ただ、彼の面倒見が良いところだけを両市議がすくい取り甘え過ぎたことも、今回、両市議の起こした騒動の原因の一つかとも思う。当該暴力事件に関して、会派・新政クラブの会長である藤原市議に対し、内野・出雲両市議より事件を起こした報告が本当になかったのかを再度問うと、「本人達からは一切、報告はなかった」とのことであった。しかし内野市議が大曾根元市議宅で泥酔のうえ起こした暴力行為は、誰ともなく会派内に知れ渡ったのだという。両市議は既に警察には示談として、当該事件は表に出さずに伏せられた。

事件当時、本人達からの報告がなかったこと、起こした行為に反省もない内野市議のために懸命な教育をした当時を思い返すと慄然(ぶぜん)たる思いがすると面(おもて)を伏せた。本紙は、内野・出雲両市議の暴力事件に関する未だ反省なき姿勢を、金泉議長・齊藤市長ともに認知していた。

—つづく—